

大竹西遺跡第3次発掘調査 —現地説明会資料—

平成9年2月15日(土) 午後1時～3時

調査担当 西村公助・樋口 薫

1. 調査地 八尾市上尾町7丁目1番地
2. 調査主体 (財)八尾市文化財調査研究会
3. 調査期間 平成8年8月19日～平成9年3月31日
4. 調査面積 約2000㎡
5. 調査の概要

大竹西遺跡は八尾市北東部の大竹・西高安・上尾町一帯に位置します。当遺跡では平成2～3年度にかけて第1次調査が実施され、弥生時代前期から室町時代にかけての遺構・遺物が検出されています。今回の発掘調査は、屋内プール建設に伴う第3次調査(OTN 96-3)にあたります。

調査の結果、第5面で検出した土坑状遺構(SK-501)から、弥生時代後期初頭の鉄剣が出土したため、一般公開することになりました。

第1面 現地表下約2.6m前後(標高T.P.+5.3m前後)

平安時代末から鎌倉時代にかけての水田6筆(水田101～水田106)、畦畔5条(畦畔101～畦畔105)を検出しました。水田は南北方向に伸びる畦畔で区画されており、東西幅は、10～12mを測ります。畦畔は幅約2m、高さ約0.2mを測ります。畦畔としては幅広であるため、上面を鳥畑として利用されていたものと推定されます。

第2面 現地表下約3.1m前後(標高T.P.+4.8m前後)

自然河川(NR-201)と、その東岸で古墳時代中期の集落跡を検出しました。NR-201は、NR-202の東部に位置するもので、幅約20m、深さ1mを測ります。河川内には、流路に直交する形で杭が多数打ち込まれていました。内部から古墳時代中期の須恵器等の遺物が出土しています。NR-201の東岸で検出した集落跡からは、溝・土坑・小穴等が多数検出されています。調査区の西部で検出された弥生時代後期初頭の遺構群は、第6面の東部の遺構に対応します。なお、調査区中央部の大半をしめるNR-202は、弥生時代前期～中期まで機能し、第6面～第2面までおよぶものです。

第3面 現地表下約3.2m前後(標高T.P.+4.7m前後)

南西から北東方向に伸びる溝(SD-301)を1条検出しました。幅約3.1m、深さ約0.45mを測り、溝内から弥生時代後期後半の遺物が出土しています。

第4面 現地表下約3.5m前後(標高T.P.+4.4m前後)

調査区の東部で幅3～4m、深さ約0.8mを測る溝3条(SD-401～SD-403)を検出しました。SD-401は南西から北東方向に伸びるもので、溝内から弥生時代後期中頃の土器が出土しています。SD-402はSD-401の西に伸びるもので、溝内から自然木が出土しています。SD-403は、先に記した2本の溝を切っており南東から北西方向に伸びています。弥生時代後期中頃の土器が少量出土しています。



調査地周辺図

第5面・第6面 現地表下約3～4m(標高T.P.+3.8m～T.P.+4.8m)

調査区中央より東側で、弥生時代後期初頭に埋没した自然河川(NR-601)を検出しました。また、同時期の集落跡を第2面の西部で検出しました。NR-601は、幅約20m、深さ約0.5m以上を測り、南西から北東方向に伸びています。NR-601からは、弥生時代後期初頭の土器類が出土しています。第2面の西部で検出した集落跡では、溝、土坑、小穴を多数検出しました。SK-203からは弥生時代後期初頭の水差形土器が出土しています。なお、当該期の遺構を検出した東部と西部では約0.8mの比高差が認められます。鉄剣が出土した土坑状遺構(SK-501)は調査区東部のNR-601の上層で検出されました。

6. 今回出土の鉄剣について

1) 出土状況—鉄剣が出土した土坑状遺構(SK-501)は、第5面で検出されました。規模は約60×120cm程度と推定されます。土坑内部には、オリブ黒色細粒砂混じり粘土が堆積していました。検出段階では上部をNR-501、東部をSD-402に切られていました。SK-501の構築時期は、本遺構の下層から弥生時代後期初頭の土器が出土していることや、上層から弥生時代後期前半の土器が出土していることから、弥生時代後期初頭に推定されます。鉄剣は、幅2.5～5cm、長さ約40cm、厚さ0.3～0.4cmを測る板材の上に切先を南西方向に向けて水平に置かれていました。

2) 鉄剣の状態—完形品で法量は、剣長35.8cm、剣身長33.7cm、剣身幅3.6cm、剣身厚0.6cm、茎長2.1cm、茎幅1.8cm、重さ225gを測ります。柄(つか)を固定する目釘孔が、関(まち)と呼ばれる部分に2個あけられています。鉄剣は鍛造品で短剣に分類され、保存状態がきわめて良好で、錆も非常に少なく鑄(しのぎ)等の特徴もよく観察できます。

3) 鉄剣の出土例—日本における鉄剣の出現は弥生時代中期前半にさかのぼります。北部九州地方を中心に分布していますが、大半が弥生時代中期後半に集中し、瀬戸内から近畿地方では後期初頭に降に出現しています。本例は近畿地方の出土例のなかで最古に位置付けられ、この時期のものとしては初例となります。この時期の鉄剣は、朝鮮半島からもたらされた鉄素材を使用して国内で加工されたものと推定されています。

7. まとめ

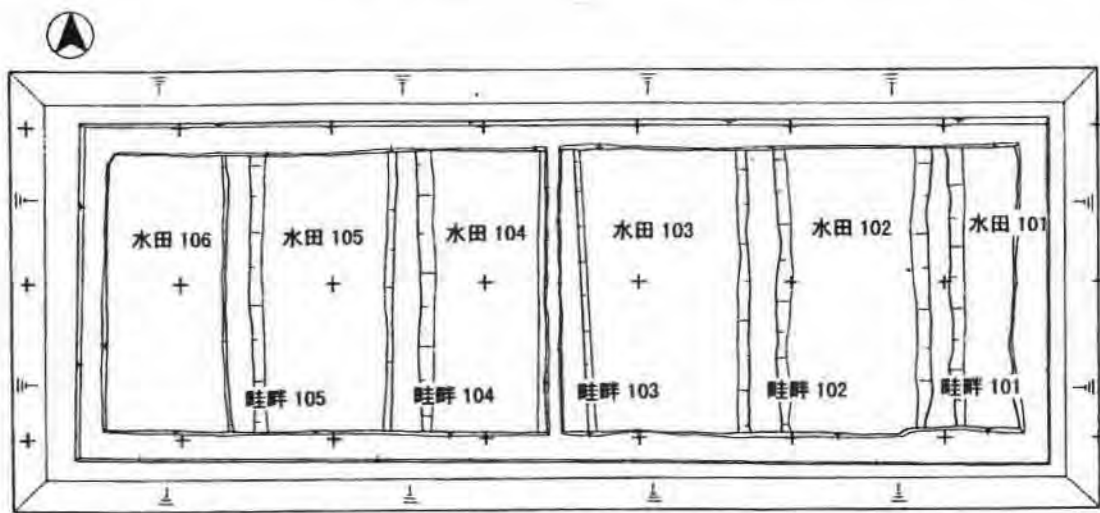
・出土した鉄剣は近畿地方では最古の例です。鉄素材は朝鮮半島の弁韓(朝鮮半島南部の国)のものと推定され、日本国内で加工されたものと考えられます。当該期における畿内と朝鮮半島との交流の一端を推定するうえで貴重な資料といえます。

・これまでに出土した鉄剣は墳墓から出土するものが多く、今回のような例はまれであり、「水」に関わる祭祀に使用された可能性も考えられます。

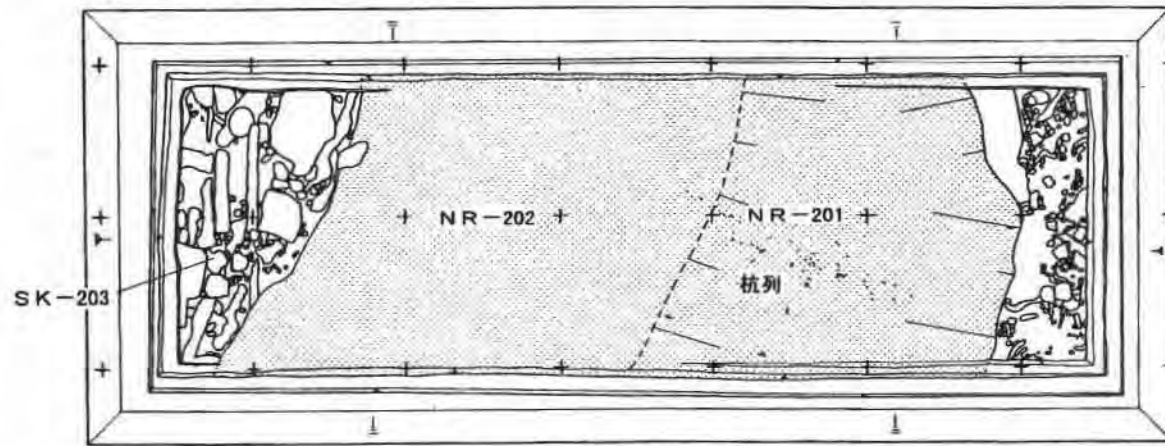
・当時、これらの鉄剣を所有できた階層は有力な地域首長であり、実用の武器としての機能の他、祭祀に用いたり、権威の象徴として利用されていたことが考えられます。

・鉄剣が使われていた畿内の弥生時代後期前半の社会では、石器を中心とした集落間の関係がくずれ、新たに鉄器の供給を核とした社会秩序が構築される時期にあたります。今回の鉄剣の出土はこれらの事柄を可視的に示すものとして評価することができます。

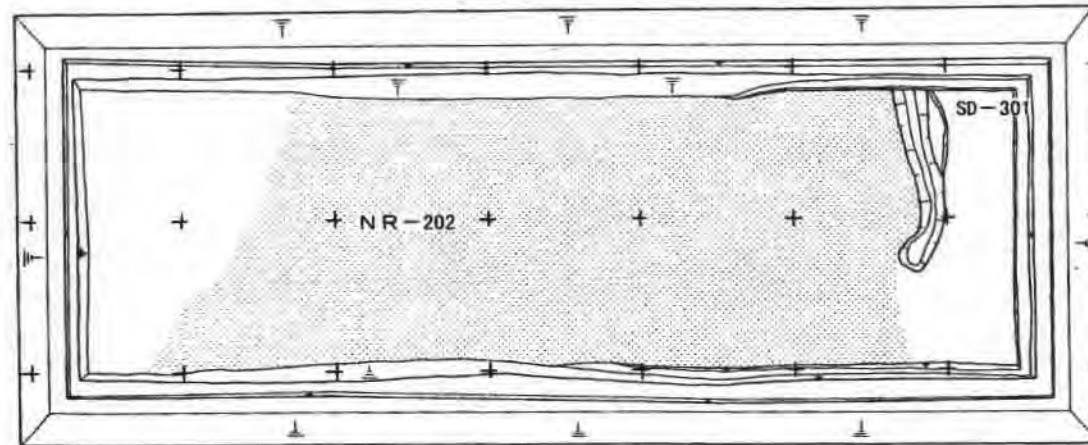
・これらの鉄剣を所有し得た有力な地域首長を伴出した集落が、大竹西遺跡に存在したことが明らかになりました。



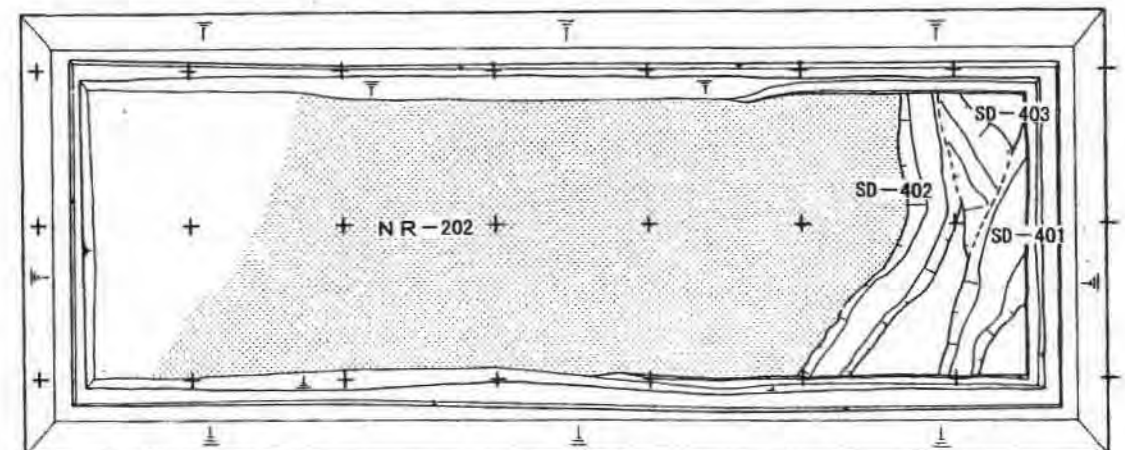
第1面 平面図 (平安時代末～鎌倉時代)



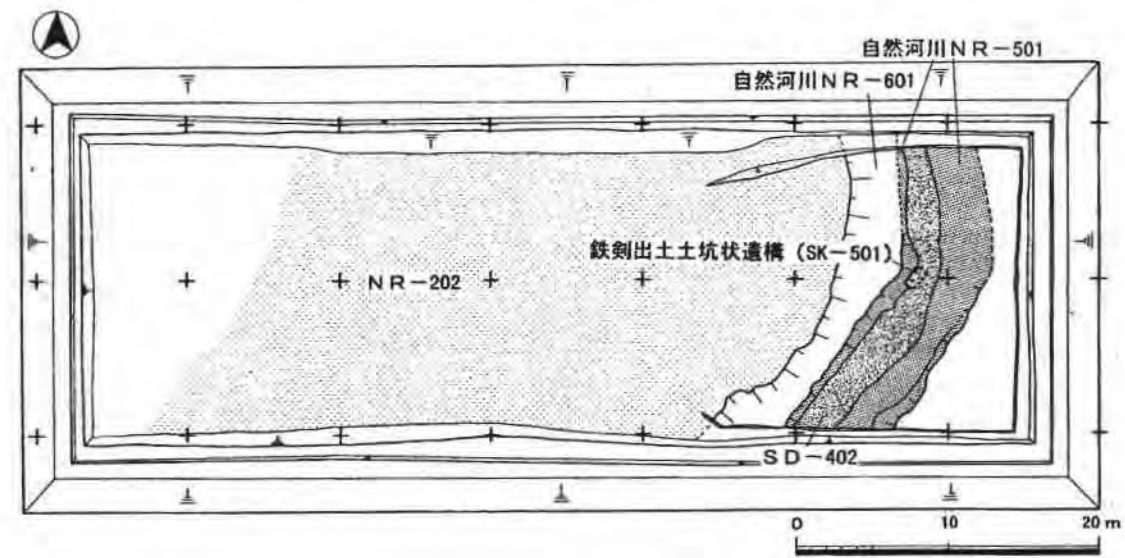
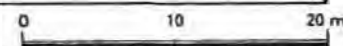
第2面 平面図 (NR-202の西岸-弥生時代後期初頭、NR-201の東岸-古墳時代中期)



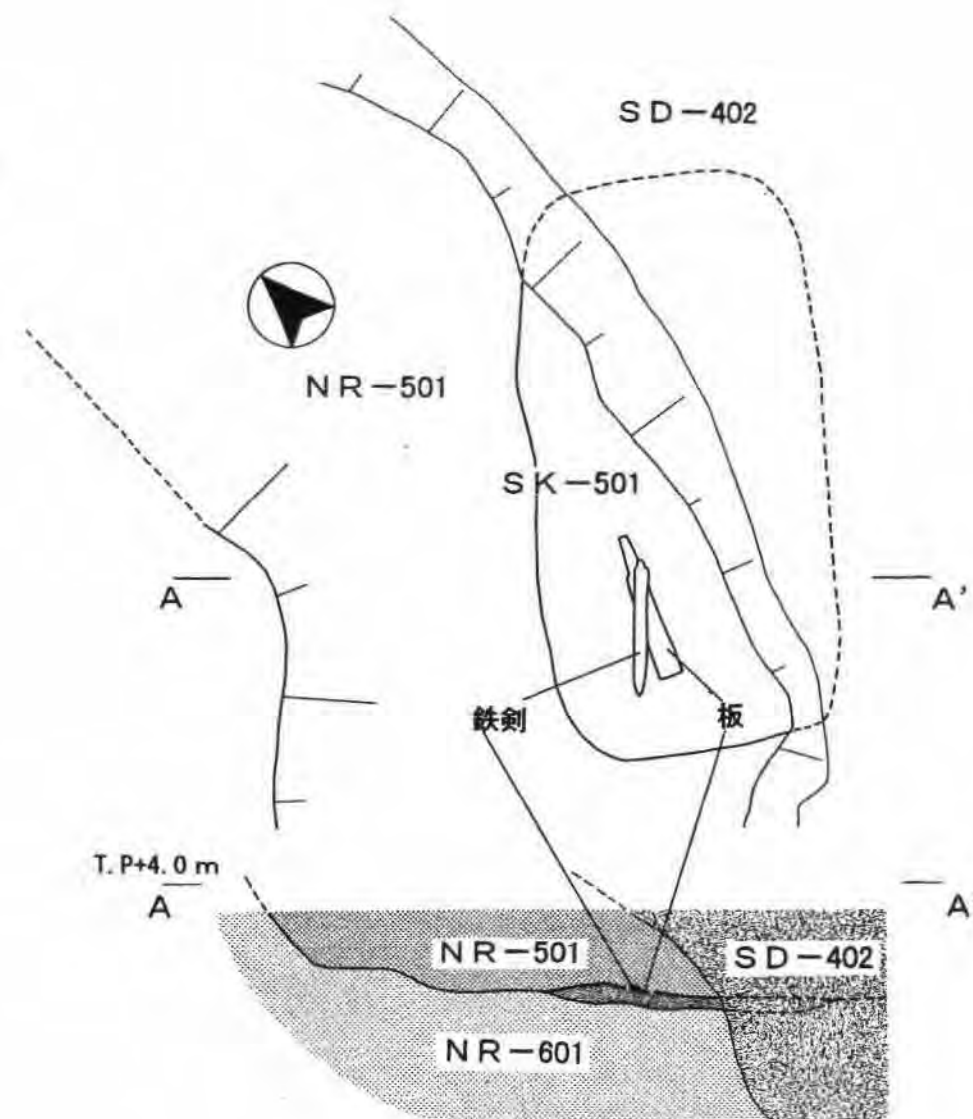
第3面 平面図 (弥生時代後期後半)



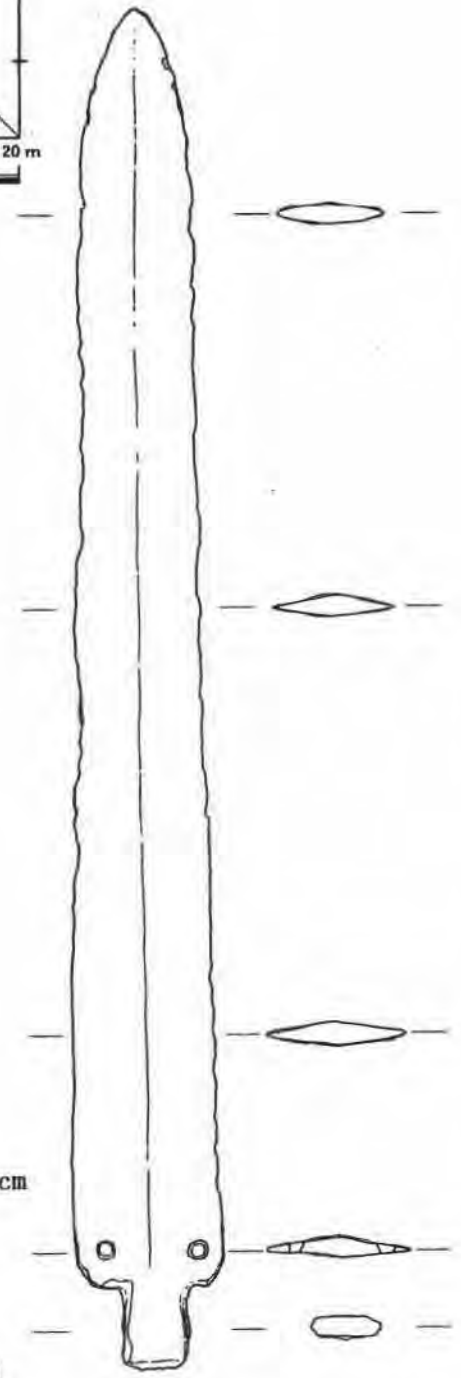
第4面 平面図 (弥生時代後期中頃)



第5面、第6面平面図 (弥生時代後期初頭)

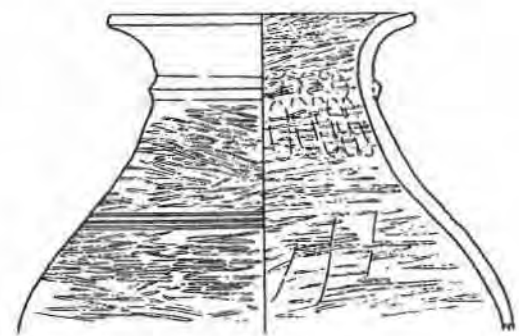


鉄剣出土状況平断面図 (S=1/20)

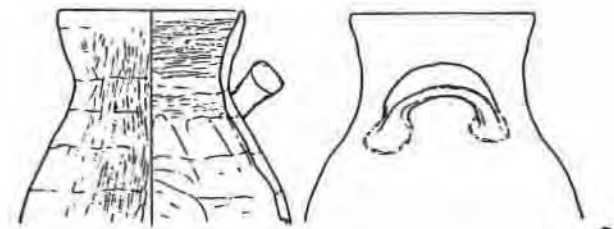


剣長	35.8cm	茎長	2.1cm
剣身長	33.7cm	茎幅	1.8cm
剣身幅	3.6cm	茎厚	0.6cm
剣身厚	0.6cm	重さ	225g

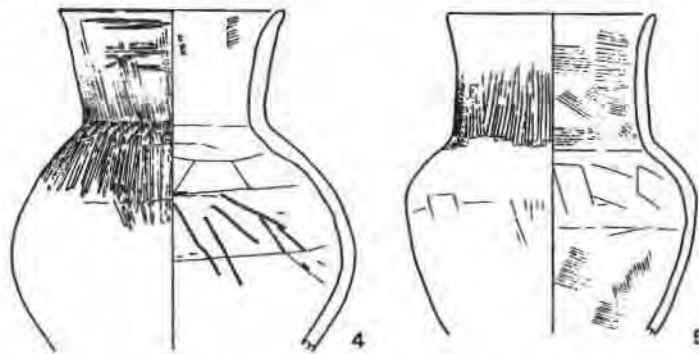
鉄剣実測図 (S=1/2)



1 NR-202 下層 壺<弥生時代前期中段階>

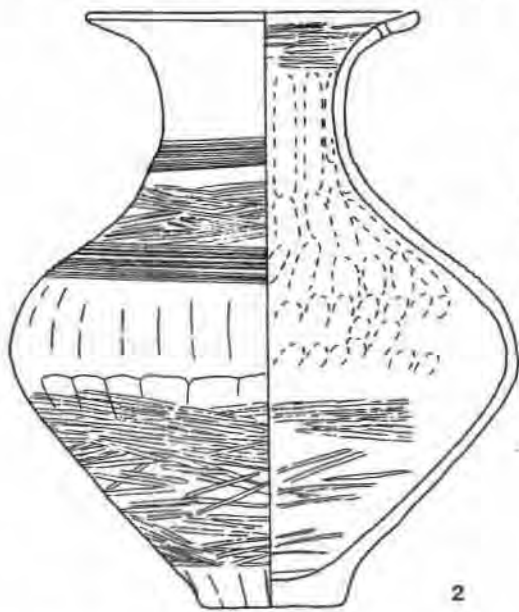


3 第2面 SK-203 水差形土器<弥生時代後期初頭>

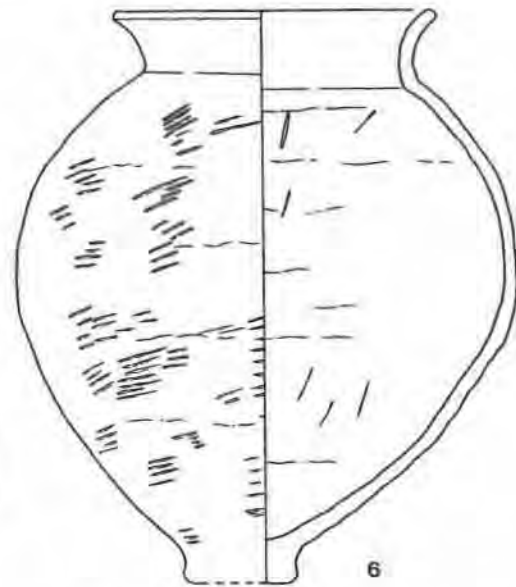


4 第2面 SK-203 長頸壺<弥生時代後期初頭>

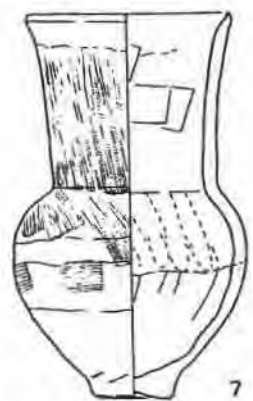
5 第3面 SD-301 長頸壺<弥生時代後期後半>



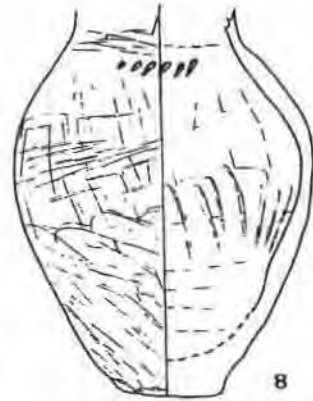
2 NR-202 下層 壺<弥生時代前期新段階>



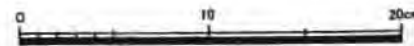
6 第3面 SD-301 壺<弥生時代後期後半>



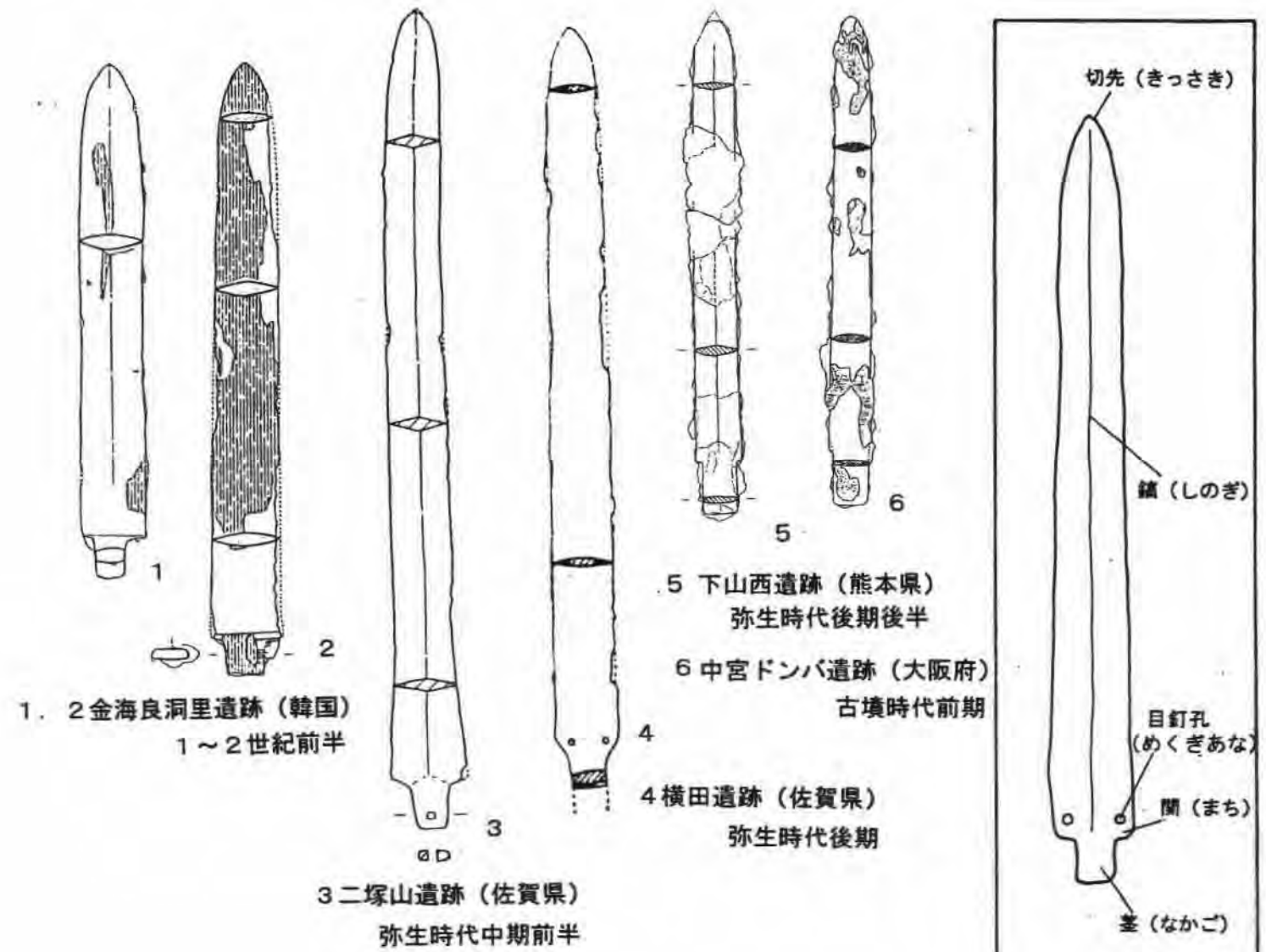
7 第4面 SD-401 長頸壺<弥生時代後期中頃>



8 第6面 NR-601 短頸壺<弥生時代後期初頭>



出土遺物実測図 (S=1/4)



鉄剣の類例 (S=1/4)

—メモ—